
"ライブエレクトロニクスとインプロヴィゼーション" ——ノイズと詩、あるいは混融する声

Mousikè 編集室 (Art-Phil)

1つの音、小さなクラスターのかげら。それから、ひと呼吸するほどの時間差とともに、アルゴリズムを経由した電子音が反響する。サンプリングされた特定のピッチは、静かにLEDの小さな青白い光を放射するだろう。「ピアノとコンピュータ」では、PCを基点としてエフェクターやアンプへとつながる幾多のラインとともに、現代における工業都市の夢が描かれる。ソステヌートで弾かれる途切れがちな旋律は、ノイズのカノンのなかで息づいている。



「4人による即興演奏」では、音響エンジニアリング、ラップ、エレクトロニック・ギター、モダン・ピアノのアンサンブルの形式で、日々の営みのなかで言祝がれる詩の断片に立ち合う。

セッション1。金属製のギロや陶器のコップの打音は、日常生活音を機械的な作動音へと変換され、複数のプログラムへと解体され、ノイズへと溶けだしていく。言葉はノイズとともに死をめぐる詩にむかって紡がれる。「……わたしはしをかこみました／うんそうけいろをかこみました／いくつかのけむりをかこみました……」、 「……いしきしきいしきしちしき……」。エレクトリック・ギターのリフレインが重なるとき、ほんのわずかな生のぬくもりに包まれる。

あるいは、コンサート・グランドのピアノはシュトックハウゼンがのぞいたであろう音響の深遠の彼方で、ラヴェルが夢みた精巧な音楽細工の欠片をやわらかく奏でる。「……さいくるとさいくるとのかんしょう／まだかれはそこにいますか／じぶんでうたう……」そして印象派的な音響の雲のなかで、ラップの軽快なリリックが流れ、途絶え、また流れていく。「……はなびらいちまい／さらりとしただきごこち／むいしきのめいそう……」最後に、セッション2。錯乱するノイズの交歓、日常と非日常の間をつなぐ生への熱を帯びたアンコール。

眼の前に広がる音響の小宇宙に、詩の音律がノイズのハーモニーを生みだす刹那を想う。■

*"... when the cry at the peak of loving
so defines my borders I can only fall into movement,
think small, back and forth —"*

A. Breton / Soluble Fish

東京私的演奏協会 第43回演奏会(2011年4月15日・渋谷スタジオ[東京都渋谷区])
"ライブエレクトロニクスとインプロヴィゼーション"

① ピアノとコンピュータ

② 4人による即興演奏

池田拓実 (pc,etc), ゆうきのうさいと (poetry), 谷保典 (gt), 木下正道 (pf)